



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	なぜ素朴実在論なのか？
Author(s)	新川, 拓哉
Citation	哲学, 55, 107-123
Issue Date	2021-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95626
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_t6.pdf



なぜ素朴实在論なのか？

新川 拓哉

1. 背景

私は、山田友幸先生の指導のもと知覚経験についての素朴实在論 (naïve realism) の擁護というテーマで博士論文を書いた。その後も、約五年にわたって素朴实在論にかかわる論文を書き続けている (現在では意識経験の本性というより包括的な研究課題に取り組んでいるけれども)。知覚経験についての素朴实在論は、「私たちの知覚的な意識経験のうちには木やコーヒーカップといった世界内の事物そのものが現れてくる」という説である¹⁾。素朴实在論は現代の知覚の哲学において比較的広範に論じられており、素朴实在論を採用すべき理由についても研究の蓄積がある。乱暴にまとめてしまうと、素朴实在論を支持する主な理由には二種類ある。一つは、素朴实在論が知覚的な意識経験についての「素朴で自然な直観」をもっとも忠実に反映しているというものだ (Hellie 2007; Pautz 2010)。もう一つは、素朴实在論を採用しなければ私たちが客観世界について考えたり知ったりできているということを説明できなくなる、というものだ (Campbell 2002; Raleigh 2011; H. Logue 2012; 2018; Johnston 2006)。私自身も、博士論文やその他の学術論文 (Nikawa 2014; 2016) では、この後者の理由を分析し補強するかたちで素朴实在論を擁護

してきた。

だが、現代の知覚の哲学の論脈に沿って展開した議論は、必ずしも私の素朴实在論を擁護する「本当のモチベーション」を十全に反映するものとは限らない。私は、哲学の専門家以外の人々―それは認知心理学者のような科学者やダンサーなどのアーティストも含む―に自分の研究を説明する際に、しばしば困難を覚える。その難しさは、部分的には、知覚の哲学の背景知識を共有するのが難しいだとか時間がかるだとか、そういったことに起因するのかもしれない。だがおそらく、それだけではない。素朴实在論を擁護しようとするとき、私は、根本的なレベルで何を目標しているのかをはっきり自覚していなかったのかもしれない。私は、この世界の真なる姿を探り当てようとしているのか、素朴实在論を帰結として導くにはどの前提をとるべきかという一種のパズルを解きたいのか、自分が強固に信じ込んでいる命題をどうにかして正当化したいのか、それとも何か別のことを目指しているのか。この点での覚束なさや本質的な問題であるように思う。誰かに研究内容をうまく説明できないのは、もしかすると、自分でも何をしているのかよく分かっていないからなのではないか？

このことに気づくきっかけになったのは、物理学者である谷村省吾氏が『現在という謎』（勁草書房二〇一九年）への補足として書いた、一〇〇ページを越える「一物理学者が観た哲学」という原稿だった。この原稿では、科学理論とは別種のものとして形而上学的・哲学的理論を構築、擁護することにどういう意義や動機があるのかが批判的に問われている。これまで素朴实在論という一つの哲学理論を擁護してきた私も、この批判的問いに応答すべきだと感じた。そして、内省をはじめてすぐに、素朴实在論を擁護する根本的な動機を自分自身でも明確に把握しておらず、素朴实在論へと至る思想的経緯を含めた真剣な考察が必要だということに気づいたのである。

この小論の目的は、私が素朴实在論を擁護する根本的な動機を叙述することで、哲学研究をおこなう意義の一つの

あり方を哲学コミュニティの内外に提示することにある³⁾。私は修士課程・博士課程を通して山田友幸先生の指導を受けながら、同じ研究室に属する多くの同僚との議論を通じて、素朴实在論をめぐる考察を発展させてきた。そのため、素朴实在論を擁護する根本的な動機について語るに、この記念号がもつともふさわしいと考えている。

2. 素朴实在論へと至るまで

本節では、私が素朴实在論に辿り着くまでの哲学的考察の流れを記述する。

私を哲学研究に誘ったのは、「脳が意識経験を生み出している」という脳因果説に対する哲学的疑問であつた。私の今の視覚経験は「いまここにコーヒークップが見えている」と表現することができる。脳因果説によれば、いまここに見えているコーヒークップも、私の意識経験の一部であるため、私の脳が生み出したことになる。だが、私が持ち上げようとした「このコーヒークップ」という語で指し示しているのは、意識経験のうちで立ち現われているこのコーヒークップのことなのであり、反射光を通じて神経活動を引き起こすことにより間接的にその経験を生み出した何かではない（ここに現れているコーヒークップが神経活動を因果的に引き起こし、その神経活動がそのコーヒークップを生じさせたと考えると、そのコーヒークップは神経活動の原因でもあるという不可解なことになる）。たとえば、その何かがここに現れているコーヒークップとどれだけ似ていようと、私が「このコーヒークップ」と呼び持ち上げようとしている当のものではない。私がその中で暮らしそれについて語る世界とは、いまここに知覚的に現前している世界のことだろう。もし脳が意識経験を生み出すとすれば、脳を取り巻く世界がどのようなものであれ、それは私の中で暮らしそれについて語る世界ではない。だとすれば、この知覚経験が、私の視界の背後に

あり私の身体の構成物であるこの脳――頭部に触れることを通じてその存在を確認でき、頭蓋を開き鏡を通じて直接に知覚することさえ可能な、私が暮らす世界のうちにあるこの脳――によつて生み出されているというのは、誤りなのではないか。

私は、「脳が意識経験を生み出している」という脳因果説に代わる哲学理論として、大森荘蔵による現われ一元論的な世界観に強く惹き付けられた。

ランプの姿が見える、この全くありふれた経験に立ち戻る。「……」常識はこの経験を、三極のパターンで見ている。私の生死にかかわらぬ世界があり、私は、今そのほんの一隅を、見ている、と描写するのである。それに対し、一体不可分の経験という描写は、ただあるのはランプの姿であり、そこから「私」や「見る」作用を切り出すことはできぬと言ふのである。世界というものが厳然と存在してそのあちこちの部分を見ているのではなく、もし世界というものがあるとすればそれはこれらの風景から何らかの形で組み上げられたものとしか考えられぬ、と言ふのである。私が見る見ないにかかわらない同一のランプが在るのではなく、在るのは時々刻々その相貌を変えるランプの姿だけだ、と言ふのである。

これは常識どころか、「……」グロテスクにまで観念論的であり独我論的な描写ではなからうか。「……」私に見られる見られないには無関心な世界、たまたま私に見られればその一片の像を見せるだけの世界、私に全く関心を持たぬ世界、そういう世界から、見えていることがその命でありその存在である風景への反転である。（大森 2015b, 84-87）⁽⁶⁷⁾

ここで提示されているのは、存在論的にプリミティブなのは「何かが現れているという経験」だけだという一元論的な世界観である。この世界観がきわめて観念論的で独我論的であることを大森は認める。そして、この世界観がそれでも正しいかどうかは「それが科学や常識の世界をもその描写のなかでの確に定位できるか否かにかかっている」(大森 2015b, 87)と述べる。これはつまり、「何かが現れているという経験」だけを所与のものとして常識的な世界観や科学的世界像をうまく解釈できるかによって、この一元論的世界観の正しさが評価されるということである。

私は、大森の現われ一元論的な世界観に強い説得力を感じた。また、客観的世界や過去の存在をその世界観のなかに位置づけようと試みる大森の語りの鮮やかさにも魅惑された。それでも、どうしても引き受けられなかったことがある。それは、大森の一元論的世界観における「他者」の位置づけである。

私が感情や情動を含めたさまざまな意識経験をもつのも同様に、私の友人や恋人はさまざまな意識経験をもつはずだ。だが、さまざまなものが立ち現れてくるのは、私のいる「今ここ」に対してだけである。そして、私の友人や恋人の意識経験は私の意識経験において立ち現れてくるものではない。確かに、彼らが腰痛で苦しんでいるときの振る舞いや、ウイスキーを舐めて恍惚としている表情は、私の知覚的意識のうちに現れてくる。だが、私が重いものを急に持ち上げたときに鈍い痛みが腰のあたりに現れてくるように、私がウイスキーを舐めたときに燻香を孕んだ深い甘みが口内に広がるように、彼らの意識経験が体感されるということはない。大森莊蔵の現われ一元論的世界観によると、存在論的な所与として認められるのは「何かが現れているという経験」だけである。だとすると、友人や恋人さえも意識経験をもつ存在者として――つまり、そこにさまざまなものが立ち現れてくる世界への開けとして――認められなくなってしまうのではないか。

これは大森自身にとっての問題でもあった。大森は次のように述べる。

他人について私が知覚するのはただ彼の身体とその身振り振舞いであることはだれしも認めよう。彼の痛みなり悲しみなりを私が共有することは論理的に不可能である。「…」しかし、「…」われわれが或る人が悲しんでいると思う時、その彼の悲しみは我々自身の経験した悲しみと多少なりとも同種同様のものであると感じている。これは生活の事実なのである。(大森 2015c: 704-5)

だが、「他者の悲しみ」といった直接に経験することが不可能なことを、いったいどのように理解すればよいのか。大森はここで「虚想」という想像様式を持ち出す。たとえば、いま私に見えているのはコーヒークップのある側面にすぎないのに、三次元物体としてのコーヒークップそのものが立ち現われているようにみえるのはなぜか。大森によれば、このことは次のように説明される。コーヒークップそのものが立ち現われているようにみえるのは、その一つの側面が知覚的に立ち現われているのに加えて、「私がいま別の視点に立っていたら見えただろう別の側面」が虚想として想像的に立ち現われていることによる、と(大森 2015c: 679-95)。そして大森は、同様の説明が意識主体としての他者についても成立すると考える。つまり、私の知覚経験のうちに現れているのは他者の身体とその振舞いにすぎないのに、意識主体としての他者―たとえば、悲しみを感じている他者―が立ち現われているようにみえるのは、「私がその他者の立場にいたならばもっていたらどう意識経験」が虚想として想像的に立ち現われているからだ、と。大森自身の論述を引いておこう。

私が或る人が悲しんでいると思う時、普通私は彼のおかれた状況に自分自身があることを想像する。時には、彼の性格人格を私自身に人格移入することを想像する。もちろんしかしこれは行動主義者に言わせれば、そのとき想像さ

れたものは単なる「今一人の私」であり、その悲しみは「私の空想的悲しみ」の想像であって、「彼の現実の悲しみ」ではない。その通り、「…」この想像は架空の別世界での別な私についての想像であり、この現実世界での別人についての想像ではない。「…」しかし、これら架空世界の想像は、「…」実の働きを働いて現実世界の事がらを独特な様式で立ち現わせしめるのである。これが「虚想」の様式なのである。虚想においては、「…」狙われ志向されているのは「彼の現実の悲しみ」なのである。「…」背面や側面の虚想の立ち現われがこもらずしては机の知覚正面が机の正面でないのと同様、人の心（悲喜、気分、意図、知覚等）の虚想がこもらずしては他人の身体は「人の身」ではないのである。（大森 2015c, 703-11）

私は、「虚想」に訴えるこうした説明には満足できなかった。「他者が意識主体として立ち現われてくるのはなぜか」という問いへの「虚想」に訴える説明は、そうした他者がほんとうに私と同等の意識主体であるということを示さない。大森が述べているとおり、私が「架空の別世界での別な私についての想像」を他者に投影しており、それによって私の経験のうちでその他者が意識主体として現れてくるのだとしても、その他者が実際に意識主体だとは示されていない。むしろ、その説明が目指すのは、「実際には他者は私と同様の意識主体ではありえないにもかかわらず、なぜ意識主体にみえてしまうのかを理解できるようにすることだと思われる。しかし、私が欲しかったものは「どうして意識主体としての他者が存在すると感じられてしまうのか」についての納得のいく説明ではなく、「他者は私と同様の意識主体として存在する」ことを示すような議論であった。私は、私の友人や恋人が意識主体として存在してほしいのであって、「彼らが（実際にはそうでないにもかかわらず）意識主体であるようにみえる理由」では満たされない。私がそうするように何かを見聞きし喜び悲しむ他者が存在しない世界というのは、あまりに寂しすぎて、とてもでは

ないが受け入れられるものではなかった。

この時に私が抱えていた哲学的問題を次のように表現できる。私は、知覚経験において現前するのは私の中で暮らす世界そのものであると強く信じている。また、私があるので暮らす世界で語り合い触れ合っている他者が、意識主体であつてほしいと願っている。だが、大森の現われ一元論的な世界観では、そうした他者が私と同じような意識主体であることを認められなさそうだ。では、どういう世界観であれば、知覚経験において現前するのは世界そのものである、という命題と、そこで会う他者は私と同じような意識主体である、という命題を同時に整合的に引き受けられるのか。この問題に取り組むことを通じて、私は素朴实在論へと行き着くことになる。

3. 素朴实在論

素朴实在論は、私の意識経験とは独立に存在する客観的世界があり、知覚経験のうちにそうした世界のあるがままの姿が現前すると考える立場である¹⁾。私がコーヒーカップを見るという知覚経験をもつとき、その経験において現前しているのは「私の生死にかかわらずぬ世界」の一部である客観的物体としてのコーヒーカップだということになる。素朴实在論においては、客観的な世界に私以外の「意識主体である他者」が含まれると考えることに特に問題はない。私にコーヒーカップの裏側が見えていないからといって、ここに現前しているのが裏側のあるコーヒーカップであるということに特に問題がないように、私が知覚できるのは他者の身体や振舞いだけであり、他者の意識経験を見たり聞いたりすることができないとしても、そこに現前しているのは意識経験をもつ他者だということに特に問題はない。素朴实在論を採用すれば、知覚経験において現前するのは世界そのものであり、その世界に私と同じような意識主体

である他者が含まれると自然に考えることができる⁽⁵⁾。

だが、素朴实在論には多くの問題があるとされてきた。ここでは三つだけ例を挙げる。(A) 幻覚のように実際にはそこないものが経験されてしまうケースをどのように説明するのか。(B) 自然科学的な世界観とどのように折り合いをつけるのか。たとえば、コーヒーカップは色をもつものとして知覚的に経験されるけれども、自然科学的な世界観によればコーヒーカップのような物体は経験されたような色を実際にもっているわけではない (Hardin 1988, chap. 2)。そのため、自然科学的な世界観は「知覚経験のうちに世界のあるがままの姿が現れる」と考える素朴实在論と折り合わないのではないか。(C) 脳活動と知覚経験のあり方のあいだに強い相関があるということをどう説明するのか。知覚対象が変化していないにもかかわらず知覚経験のあり方が変化することがあり、実験科学によればこの変化ともつともよく相関しているのは脳活動の変化である (Pautz 2013, sec. 3; forthcoming-a)。このことを踏まえると、脳活動が知覚経験を生み出していると考えるべきなのではないか⁽⁶⁾。

私を含めた現代の素朴实在論の擁護者は、こうした課題に取り組むことにより素朴实在論を守ろうとする。たとえば、素朴实在論者は上記の三つの問題に次のように応答するかもしれない。(A) ふつうに物体を知覚しているときの経験と幻覚に陥っているときの経験は別種のものであり、幻覚はむしろ想像の一種である (Allen 2015)。(B) 視覚科学や物理学といった自然科学は日常的な三次元物体が色をもたないということを含意しない。自然科学が提供するものは、そうした三次元物体のあり方を色彩語を用いずに記述する方式にすぎない⁽⁷⁾。(C) たとえ知覚経験の変化と脳活動の変化が相関していたとしても、その相関を説明するのに「脳活動が知覚経験を生み出す」と考える必要はない。他の説明も十分に可能であり、たとえば素朴实在論者は、「脳は知覚対象のどの性質が経験に現れてくるかを選り出す」と考えることができる (Fish 2009, 134-41)。

だが、こうした説明に対してもさらなる批判が向けられる。(A) ふつうに物体を知覚するときの経験と、幻覚に陥つておときの経験はその主体にとつて区別不可能なほど似ているかもしれない。それほど似ている経験が別の種類の経験だというのは不自然である。そのため、知覚と幻覚は同じ種類の経験だと考えるほうがもつとらしいが、そうだとすると素朴实在論は維持できない。なぜなら、幻覚においては「客観的な世界のあるがままの姿が現前している」わけではないからだ⁸⁾。(B) 私たちの素朴な世界観に基づいた予測は粗いうえによく失敗する。したがって、素朴な世界観はバイアスや誤解に満ちていると考えるのが自然である。他方で、自然科学に基づいた予測はより精細でより信頼できる。したがって、自然科学が提供する記述は、世界のより正確なあり方を表現していると考えべきであり、その記述において参照されないものは、実際には存在しないと考えるべきだ⁹⁾。(C) 脳が処理するのは知覚対象についての情報であり、知覚対象やその性質それ自体ではない。にもかかわらず、どのようにして脳が「知覚対象のどの性質が経験に現れてくるかを選び出す」ことができるのかが不明である。

素朴实在論を擁護するためには、こうした再批判に対してさらに反論を試みなくてはならない。もつともシンプルな反論は「そうでなければならぬ」とまでは言えない」形式のものだろう。(A) たとえ知覚と幻覚が区別できないほど似ているならば、それらが同じ種類の経験だと考えるのが自然かもしれない。だが、そう考えねばならないわけではない¹⁰⁾。(B) 自然科学的な記述が世界の正しいあり方を表現しているのはもつともだが、だからといってその記述のうちに参照されないものは存在しないとまでは言えない。(C) 脳がどうやって「知覚対象のどの性質が経験に現れてくるかを選択」するのかはまだ不明だが、そうしたメカニズムがありえないとまでは言えない。

こうしたタイプの再反論が多少なりとも説得力をもつのは、素朴实在論にこだわる強い理由がある場合に限られる。素朴实在論を採用すべき強い理由があるならば、他の点で問題があったとしてもそれが決定的なものでない限り、素

朴实在論を捨てないほうがよいからだ。では、なぜ私は素朴实在論にこだわるのか。

4. 素朴实在論を擁護する動機

私が素朴实在論を採用する理由は、それが「知覚経験において現前するのは私がその中で暮らす世界そのものである」という命題と、「知覚経験において私と同様の意識主体である他者が現前する」という命題を同時に整合的に認められるからである⁽¹⁾。第二節で述べた通り、私は「知覚経験において現前するのは私がその中で暮らす世界そのものである」と信じている。また、「私がその中で暮らす世界で語り合い触れ合っている他者が、意識主体であつてほしい」と願っている。この願望をあきらめて、「知覚経験において現前するのは、私がその中で暮らす世界そのものである」という信念だけにこだわるなら、私は素朴实在論を捨てて大森の現われ一元論で満足することもできるし、他のタイプの観念論的世界観でもよかったかもしれない⁽²⁾。それどころか、経験において現前する現象世界と現前しない物的世界の二元性を認め、意識主体の数だけ互いに独立の現象世界があり、それらはどれも共通の物的世界に支えられているという描像さえ受け入れられたかもしれない。そうした存在論を受け入れることができず、素朴实在論を手放すことができないのは、ひとえに私が上記の願望を抱えているからである。

ここまでの考察を通じて明らかにするのは、私は部分的には実存的な動機に基づいて素朴实在論を擁護しているということだ。私は「私が語り合い触れ合っている他者が、私と同じように見聞きし感じる意識主体であつてほしい」という願望をもつ。しかし、脳因果説や現われ一元論が正しいのであれば、私の知覚経験に意識主体である他者が現れることは不可能になってしまうと考えられる。「私が語り合い触れ合っている他者は意識主体である」という命題

がこの世界で成立していると納得し安堵するためには、その命題が整合的に位置づけられるような世界観を描き出し、それが真でありそうだと自分自身を説得するしかない。だが、内的に不整合だったり自然科学的知見と対立してしまうような世界観が世界の真なる姿を反映しているとは考えにくい。そのため私は、内的整合性をもつように、自然科学的知見と対立しないように、素朴实在論的な世界観を構築するという作業を行っているのである。もう少し具体的に述べ直すと、「私の存在や経験とは独立に存在する客観的な世界があり、知覚経験のうちでそうした世界のあるがままの姿が現前する」という素朴实在論のテーゼを核とし、知覚と幻覚の関係や、自然科学理論の位置づけや、脳と知覚経験の関係などが内的不整合や説明のギャップなく描き出されているような、そういう命題のネットワークを構築しようとしているのである。

なぜ私は素朴实在論を擁護するのか。この問いに対する結論は次のようなものだ。私が意識経験を通じて語り合い触れ合う人々は、私と同様に色彩と情動に満ちた生を生きる意識主体であってほしい。私が見つめ合う恋人が、私の脳活動が生み出した像にすぎないだとか、ただの立ち現われにすぎないというのは、あまりに悲しく寂しすぎる。とはいえ実際にそうなっているかどうかを実験的に検証するのは不可能にみえるし、そんなはずはないと無根拠に断じることができるとは私は独断的になれない。それでも、私が生きるこの世界がそんな寂しい世界ではないと腹の底から納得し安心したい。そのため私は、内容豊かで内的不整合のない素朴实在論的世界観を構築しようとしているのである。

素朴实在論的な世界観はこの世界のあり方を表現するものとされている。たとえば素朴实在論の擁護という試みが実存的な動機に突き動かされていたとしても、その意味では他の自然科学的な探求と同じく「この世界の真なる姿を探り当てようとする」ものである。とはいえ、大森の現われ一元論といった他の競合理論と素朴实在論のどちらが正しい

いかは、多くの自然科学の理論とは違って実験的に検証できるわけではない (Raleigh 2009)。それゆえ、どちらの世界観が世界の真なる姿を表現しているのかを決める基準は明らかではない。世界観の単純性や科学的知見・常識的信念との整合性といった哲学者の間で使われている評価基準をいくつか挙げることはできるが、どれをどの程度重視すべきなのかについて合意があるとは言えない¹³⁾。この点では、素朴实在論を擁護するという試みは、自然科学理論の正しさを検証するという試みと異なるだろう。

谷村氏は「世界の真理を知りたいと思うなら、私は哲学はやらない。ストレートに科学をやればよいと思う」と述べる (谷村 2019, p. 62)。確かに「私が経験において語り合い触れ合っている他者は意識主体であるのか」という問いは科学の主題にはならないだろう。それでも、この問いは世界の真なる姿についての問いであり、同時に私の生にとつて切実な問いでもある。私は、世界の真なる姿が私の望んだものであつてほしいと願い、同時に、実際にそうでありうることを示そうとしている。素朴实在論を擁護するという試みは、実存的動機に導かれながらも、世界のありようを突き止めようとするものでもあるのだ¹⁴⁾。

註

(1) 現代の心の哲学に詳しくない読者に向けて、本稿で用いられる「知覚経験」や「知覚的な意識経験」という概念の簡単な説明をしておこう。それらは「何かを見たり聴いたり嗅いだり味わったり触ったりしているときの意識体験」のことを指す。たとえば、アイラ島のウイスキーを味わうときの知覚経験は、「口内にモルトの甘みと果物の香りと煙臭さが広がるという意識体験」などと記述できるし、冬の夜にススキノの交差点で信号待ちをするときの知覚経験は、「夜空に輝くニッカウスキーの看板が粉雪でにじんで見えるという意識体験」などと記述できる。

(2) 一つ注意しておきたいが、谷村氏が主題的に論じているのは時間の哲学や (科学哲学上の) 实在論対反实在論の論争であり、知覚の哲学やその文脈での素朴实在論ではない。そのため、この小論は谷村氏の議論への直接的な応答を指すものではなく、そこで提起されているようにみえる

哲学者に対する問いかけに私なりの仕方で答えることを目指すものである。

(3) 本稿を執筆時に日本国外に滞在していたため、大森莊蔵の著作として電子書籍を参照せざるを得なかった。紙の書籍とページ数が異なっているため参照箇所を探しにくいかもしれないが、ご理解いただけると幸いである。

(4) 素朴实在論の定式化にはさまざまなやり方があるが、本稿ではそうした理論的詳細には踏み込まない。この論点については、Genone (2016) や Soteriou (2016, chap. 4) などが参考になる。

(5) 大森の現われ二元論から素朴实在論へとこうして移行できたのは、私の関心が「どうしてある側面しか見えていないにもかかわらず、それが裏側のあるコーヒーカップだと言えるのか」や「どうして他者の意識経験を共有できないにもかかわらず、他者が意識主体だと言えるのか」といったタイプの懐疑論的な問いに向けられていなかったからでもあるだろう。こうした懐疑論的な問いが私の主要な哲学的関心であったならば、素朴实在論が論点先取のように見えていたかもしれない。先に述べたように、私の関心は「私の知覚経験において現前するのは私の中で暮らす世界である」と「そうした世界に意識主体である他者が含まれる」という二つの命題を整合的に取り込める世界観を探すところにあった。客観的世界や意識主体である他者が存在することは、疑いの対象ではなく所与として受け入れるべき事柄であった。そのため、素朴实在論が自然な選択肢として浮かんできたのであろう。

(6) 他の素朴实在論の問題については、Genone (2016, secs 5.1, 5.4) が参考になる。

(7) これは、大森莊蔵の「重ね描き」というアイデアを転用したものである (大森 2015a)。大森は素朴实在論者ではないが、「重ね描き」のアイデアは素朴实在論の枠組みにも接続できる。

(8) これは「幻覚論法 (the argument from hallucination)」と呼ばれるものである。幻覚論法をめぐるさまざまな議論については、Smith (2002) や Soteriou (2016) が参考になる。

(9) この種の考えは、たとえば Sellers (1963) のうちに見て取ることができる。

(10) これは実際に選言説 (disjunctivism) と呼ばれる素朴实在論者の標準的な応答である。選言説をめぐる論争を概観するためには、Soteriou (2016) や Nikawa (2019) が参考になる。

(11) 素朴实在論でなくともこの二つの命題を同時に認めうると論じられるかもしれない。たとえば、現代風の表象説でもこの二つの命題を同時に認めることができると論じられるかもしれない。私自身はそうした議論が成功すると考えていないため、ここでは表象説について詳しく論じない。表象説の解説については Pautz (forthcoming b) を参照してほしい。素朴实在論の立場からの表象説への批判については、Brewer (2011) や

Maloney (2018) を参照するとよい。

- (12) たとえば、Robinson (1994) のセンスデータ説や Foster (2000) の観念論など。
 - (13) 哲学理論の評価基準としての単純性については Baker (2016) が参考になる。
 - (14) 付記学位取得後も論文を書きながら「山田先生なら何と言っかな」と想像することがありました。勢いにまかせて根拠薄弱な主張をしてしまつたとき、批判対象の議論を都合よく解釈しているとき、「本当にそうなの？」という山田先生の声が聞こえてきて、あわてて修正したことが何度もあります。とはいえ最近では、頭の中の山田先生におたずねしなくとも、自分の声で「本当にそうかな？」と反省できるようになってきました。ようやく山田先生の指導が血肉になったのかもしれない。
- 山田先生から学んだことを数え上げれば切りがありませんが、「哲学のやり方」について特に印象に残っていることが二つあります。一つは、学部生向けの授業でおっしゃっていた「哲学は実技」という言葉。もう一つは論文指導のときにいただいた「概念の網の目を細かくしなければならぬ」という指摘です。どちらも、私の哲学観に深く影響を与えました。いまでは私も自分の指導学生に「哲学は実技だ」とか「概念の網の目を細かくしよう」と教えています。山田牧場の暖簾分け、とは言いすぎでしょうか。また「本当にそうなの？」という声が聞こえてきそうです。

英語文献

- Allen, Keith. 2015. 'Hallucination And Imagination'. *Australasian Journal of Philosophy* 93 (2) : 287-302.
- Baker, Alan. 2016. 'Simplicity'. In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Winter 2016 Edition. Metaphysics Research Lab, Stanford University.
- Brewer, Bill. 2011. *Perception and Its Objects*. Oxford University Press.
- Campbell, J. 2002. *Reference and Consciousness*. Oxford University Press.
- Fish, William. 2009. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford University Press.
- Foster, John A. 2000. *The Nature of Perception*. New York: Oxford University Press.
- Genone, James. 2016. 'Recent Work on Naïve Realism'. *American Philosophical Quarterly* 53 (1) .
- Hardin, C. L. 1988. *Color for Philosophers: Unweaving the Rainbow*. Indianapolis.
- Helie, Benj. 2007. 'Factive Phenomenal Characters'. *Philosophical Perspectives* 21 (1) : 259-306.

- Johnston, Mark. 2006. 'Better than Mere Knowledge? The Function of Sensory Awareness'. In *Perceptual Experience*, edited by T. S. Gendler and John Hawthorne. Oxford University Press.
- Logue, Heather. 2012. 'IX—Why Naïve Realism?' *Proceedings of the Aristotelian Society (Hardback)* 112 (2pt2) : 211–37.
- . 2018. 'World in Mind: Extending Phenomenal Character and Resisting Skepticism'. In *In the Light of Experience – Essays on Reasons and Perception*, edited by J. Gersel, R. Thybo Jensen, M. S. Thining, and S. Overgaard, 213–36. Oxford University Press.
- Maloney, J. Christopher. 2018. *What It Is Like To Perceive: Direct Realism and the Phenomenal Character of Perception*. New York: Oxford University Press.
- Nikawa, Takuya. 2014. 'Naïve Realism and the Explanatory Gap'. *An Anthology of Philosophical Studies*, no. 8: 123–33.
- . 2016. 'Naïve Realism and the Explanatory Role of Visual Phenomenology [Special Issue]'. *Argumenta - Journal of Analytic Philosophy* 1 (2) : 219–31.
- . 2019. 'Classification of Disjunctivism About the Phenomenology of Visual Experience'. *Journal of Philosophical Research* 44: 89–110.
- Pautz, Adam. forthcoming. 'Naïve Realism and the Science of Consciousness'. *Analytic Philosophy*.
- . forthcoming. 'Representationalism About Consciousness'. In *Oxford Handbook of the Philosophy of Consciousness*, edited by Uriah Kriegel. Oxford University Press.
- . 2010. 'Why Explain Visual Experience in Terms of Content? In *Perceiving the World*, edited by Bence Nanay, 254–309. Oxford University Press.
- . 2013. 'Do the Benefits of Naïve Realism Outweigh the Costs? Comments on Fish, *Perception, Hallucination and Illusion*'. *Philosophical Studies* 163 (1) : 25–36.
- Raleigh, Thomas. 2009. 'Understanding How Experience "Seems"'. *European Journal of Analytic Philosophy* 5 (2) : 67–78.
- . 2011. 'Visual Experience & Demonstrative Thought'. *Disputatio* 4 (30) : 69–91.
- Robinson, Howard M. 1994. *Perception*. New York: Routledge.
- Sellars, Wilfrid. 1963. *Science, Perception and Reality*. New York: Humanities Press.
- Smith, A. D. 2002. *The Problem of Perception*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Soteriou, Matthew. 2016. *Disjunctivism*. Routledge.

邦語文献

- 谷村省吾. 2019. 「物理学者が見た哲学」 <http://www.phys.cs.is.nagoya-u.ac.jp/~tanimura/time/note.htm> (アクセス日二〇一九年十二月一日)
- 大森荘蔵. 2015a. 知覚風景と科学的世界像, In 大森荘蔵セレクション, 電子書籍版, 442-69, 平凡社.
- . 2015b. 科学の地形、と哲学, In 物と心, 電子書籍版, 21-91, 筑摩書房.
- . 2015c. 虚想の公認を求めて, In 物と心, 電子書籍版, 660-731, 筑摩書房.

付記

学位取得後も論文を書きながら「山田先生なら何と言うかな」と想像することがありました。勢いにまかせて根拠薄弱な主張をしてしまったとき、批判対象の議論を都合よく解釈しているとき、「本当にそうなの？」という山田先生の声が聞こえてきて、あわてて修正したことが何度もあります。とはいえ最近では、頭の中の山田先生におたずねしなくとも、自分の声で「本当にそうかな？」と反省できるようになってきました。ようやく山田先生の指導が血肉になったのかもしれません。

山田先生から学んだことを数え上げれば切りがありませんが、「哲学のやり方」について特に印象に残っていることが二つあります。一つは、学部生向けの授業でおっしゃっていた「哲学は実技」という言葉。もう一つは論文指導のときにいただいた「概念の網の目を細かくしなければならぬ」という指摘です。どちらも、私の哲学観に深く影響を与えました。いまでは私も自分の指導学生に「哲学は実技だ」とか「概念の網の目を細かくしよう」と教えています。山田牧場の暖簾分け、とは言いすぎでしょうか。また「本当にそうなの？」という声が聞こえてきそうです。